様式第3号

# 自己評価報告書（最終報告）

| 報告者 | 生活・健康系コース<br>（保健体育）／乾　信之 |
|---|---|

■平成24年度の目標に対する自己点検・評価

Ⅰ．学長の定める重点目標

Ⅰ－1．科研費申請に向けた計画等

国立大学法人運営費交付金は年々削減され，教員の研究費配分も厳しくなってきており，教員各自が研究のための外部資金を獲得しなければならない状況である。そこで，科研費申請に向けて，あなたが考えているテーマと計画等について示してほしい。

**1．目標・計画**

研究テーマとしては，　1）　道具に対する身体イメージの延長，　2）　関節角度の知覚に与える筋疲労の影響，　3）　力制御における個人間協応に与える様々のフィードバックの影響，　4）　タイミング，　力制御，　身体イメージの縦断的発達などが考えられる．

**2．点検・評価**

今年度から3年間科研費を獲得しており，上述の研究テーマは以下の論文に反映されている。

Ⅰ－2．大学院学生定員の充足に向けた取り組み

専攻・コースのこれまでの大学院学生定員の充足状況を踏まえた上で，あなたは定員充足のためにどのような取り組みを行うか，具体的に示してほしい。

**1．目標・計画**

学会等での人脈により，　毎年１－３人を確保するように努める．　その際，　中学生レベルの知識が学習されているかどうかを確認する．

**2．点検・評価**

学会での人脈を頼って，リハビリテーション関係の大学（帝京科学大学医療科学部，　土佐リハビリテーションカレッジ）に学生を送り込んでくれるように依頼した。

Ⅱ. 分野別

Ⅱ－1. 教育・学生生活支援

**1. 目標・計画**

博士候補認定試験を控える院生には論文の数は十分にあるので，研究成果が海外のハイ・インパクトの雑誌に掲載されるように指導する.

修士課程の院生には修士論文の指導の上に，教員採用試験への支援を行う.

学部3年のゼミ生には実験研究の面白さを獲得するように指導する.

**2. 点検・評価**

博士課程の院生は8月と11月の日本体育学会，日本スポーツ心理学会においてsocial coordinationに関する発表を指導し，以下の論文を出版した:
"Effects of force levels on error compensation in periodic bimanual isometric force control" Journal of Motor Behavior, 44, 261-266, 2012.
"Effects of practice on magnitude and structure of force variability during periodic unimanual isometric force production" Perceptual and Motor Skills: Learning & Memory, 115,
1-13, 2012.
"Two heads are better than one: both complementary and synchronous strategies facilitate joint action" Journal of Neurophysiology, 109, 1307-1314, 2013.
修士課程の修了生は以下の論文を出版した:反応時間と運動時間に与える運動系列の長さの影響，体育学研究，57, 567-576, 2012。

Ⅱ－2. 研究

**1. 目標・計画**

研究課題「系統的な身体イメージの変化を引き起こす感覚入力の分析」の科研費(平成24-26年度)が獲得されたので，研究成果が海外のハイ・インパクトの雑誌に掲載されるように努める.

**2. 点検・評価**

科研費により，以下の論文を出版した:
"Systematic changes in the perceived posture of the wrist and elbow during formation of a phantom hand and arm" Experimental Brain Research, 218, 487-494, 2012.
"Loss of large-diameter nerve sensory input changes perceived posture" Experimental Brain Research, 221, 369-375, 2012.
"Effects of visual information on perceived posture of an experimental phantom foot" Experimental Brain Research, Published online: 02 March 2013.
9月と11月に日本神経科学大会，日本体力医学会大会，日本スポーツ心理学会で身体イメージの研究を発表した。

## Ⅱ－3. 大学運営

**1. 目標・計画**

学部教務委員と1年生の担任を務める.

**2. 点検・評価**

学部教務委員と学部1年生の担任を務めた。

## Ⅱ－4. 附属学校・社会との連携, 国際交流等

**1. 目標・計画**

島根県の身体教育医学研究所うんなん と Neuroscience Australia との共同研究を進める.

**2. 点検・評価**

附属特別支援校での実験から以下の論文を出版した:
"Adolescents with Down syndrome exhibit greater force and delay in onset of tapping movements" Perceptual and Motor Skills, 114, 826-836, 2012.
雲南の研究所とは身体イメージの発達研究, Neuroscience Research Australiaとは科研費の研究で連携した。
国内外の学術雑誌の査読を数件行った。
(独)日本学術振興会より科学研究費委員会専門委員を委嘱された。

## Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)

本年度の特筆すべき成果は院生のsocial coordinationに関する論文が行動指標だけで神経生理学のトップジャーナルに掲載されたことである。
また, 科研費関連の身体イメージの研究は系統的な成果が得られ, 3篇の論文を出版した。
社会貢献では科学研究費委員会専門委員として90件以上の申請書類を審査した。